

# ヴィヴェーカ・チューダーマニ（一一七二）

―不二元という生き方―

山 本 和 彦

まえがき

ヴェーダーンタ学派のなかのアドヴァイタ（不二元）派の重要なテキストである『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』（Vivekaudamani、識別の宝冠）をサンスクリット原典から全訳する。全五八一詩節あり分量が多いので、五回に分けて掲載する予定である。『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』では「ブラフマンに安住せよ」という教えが頻出する。この教えを「不二元なるブラフマンとして生きよ」と解釈して、「不二元という生き方」というサブタイトルを付けた。

『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の作者は不明である。刊本や写本の奥付ではシャンカラ（Śaṅkara）<sup>1</sup> 作となっているものもあるが、初代シャンカラ師（Ādi Śaṅkara Ācārya 七〇〇―七五〇年頃）<sup>2</sup> 作ではないという研究が多い。本書は『ブラフマーストラ註』や『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド註』などシャンカラ真作のものと比べると、内容に思想的な深さがなく、シンプルである。文体は詩的であり、非常に美しい。古ウパニシャッドの文章を絶妙に組み合わせ、自分の思想を表現するというシャンカラの特徴は見られない。初代シャンカラ師ではなく、何代目かのシ

ヤンカラ師作であるという研究もある。<sup>3</sup>たとえ初代ヤンカラ師の真作でなくても、本書はアドヴァイタ派の思想が簡潔にまとめられており、ヤンカラ以降のヤンカラ派の基本的な思想を知る上で重要なテキストである。

解脱論はヒンドゥー教のすべての学派の主要テーマであるが、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の特徴として現生解脱（ジヴァンムクテイ）<sup>4</sup>を積極的に認めている点が挙げられる。しかし、解脱論の重要なテーマである知行併合論<sup>5</sup>については、祭式行為が否定されている程度で、それ以上のことは述べられていない。誠信（バクテイ）については、ヤンカラは重要視しないが、<sup>7</sup>『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』では解脱の直接原因であるとされている。<sup>8</sup>さらに存在・知・歓喜（サット・チット・アーナンダ）というブラフマンの定義が出て来るが、これはヤンカラ以降の思想である。

『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』は、Srirangam 1910版で全五八一詩節ある。註釈書は、ヤンカラの年代に近いものは存在しないが、*Encyclopedia of Indian Philosophies* (Vol. I, 1970, 1983, 1995) などによれば、次のものがある。

Prabhā (Keśavānanda Yati, 1800).

Subodhinī (Haridāsa Mīra, 1901).

Vivekodaya (Śrī Sacchidananda Śivābhava Nrsimha Bharati Mahāsvāmi, 1858-1912).

Vyākhyā (Candrasekhara Bharati, 1892-1954).<sup>10</sup>

Bhāvaprakāśa (Venkatanātha, 1982).

『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』が七〇〇年代に生存していたヤンカラの真作であれば、最古の註釈書が一八〇〇年というのは違和感がある。現代語訳は Madhavānanda 1921 など多数あるが、学術的なものは多くない。また『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』は、『アディアートマ・ウパニシャッド』(Adhyātmapanīṣad アートマンに関する奥義書)<sup>11</sup>を二四回引用していると指摘されているが、<sup>12</sup>現代語訳の多くはその点についてまったく触れていない。実際には『ヴ

イヴェエカ・チューダーマニ』には『アディアートマ・ウパニシャッド』が五九詩節登場する。『アディアートマ・ウパニシャッド』は韻文が七〇詩節と散文の序論と結論とがあり、詩節では約八割が『ヴィヴェエカ・チューダーマニ』と重なる。引用が多く、順番も正確に守られており、異読も少ない。この二つのテキストには非常に親近性がある。引用文は、ほとんどがそのままであるが、手の込んだアレンジもある。『ヴィヴェエカ・チューダーマニ』は『アディアートマ・ウパニシャッド』を引用する際、それが天啓聖典であることや引用文であることを明言しない。またシャンカラ真作では、引用される天啓聖典は古ウパニシャッドがほとんどであり、『アディアートマ・ウパニシャッド』のような新ウパニシャッドは珍しい。この点を根拠に、中村一九八九aでは『ヴィヴェエカ・チューダーマニ』はシャンカラの真作ではないと言われている<sup>15</sup>。さらに『ヴィヴェエカ・チューダーマニ』は『カイヴァルヤ・ウパニシャッド』、『アドヴァヤタラカ・ウパニシャッド』、『ヌリシンハプルヴァターパニーヤ・ウパニシャッド』、『ニルアーランバ・ウパニシャッド』、『ナーラダ・パリヴラージャカ・ウパニシャッド』、『デージョー・ビンドウ・ウパニシャッド』、『トリパード・ビプーティ・マハーナーラーヤナ・ウパニシャッド』、『ヴァラーハ・ウパニシャッド』などの新ウパニシャッドからの引用、もしくはそれらと親近性がある。

本書のタイトルにもなっている「識別」(ヴィヴェエカ)とは、アートマン(魂)とアートマンでないもの(感官や身体など)との識別である<sup>16</sup>。アートマン(ātman 我)は個人の主体、本質、魂、自己、身体の所有者(ātmi)である。このアートマンと万物を超越した最高絶対の根本原理であるブラフマン(Brahman 梵)との同一性(梵我一如)が、ウパニシャッド文献やシャンカラ派の主題である。『ヴィヴェエカ・チューダーマニ』が最も重要視する天啓聖典の大文章は、「あなたはそれである」(タット・トウヴァム・アシ)<sup>17</sup>である。そしてアートマンを識別することにより、ブラフマンを体得することが『ヴィヴェエカ・チューダーマニ』の主題である。

『ヴィヴェエカ・チューダーマニ』は、師と弟子との対話形式になっている。実際ではなく形式として、全体の語り

手はシャンカラである。不二一元という真理を恩寵とともに説く師であれば、解脱を求める弟子を解脱させることができる。第五八一詩節で、「不二のブラフマンを、シャンカラの声が経験させる」と言われているので、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の思想は形式上はシャンカラのものである。

冒頭の帰依文で、帰依者の師はゴーヴィンダであると言われている。ゴーヴィンダはシャンカラの師なので、弟子はシャンカラである。この師弟関係を当てはめると、第四八〇詩節から第五二〇詩節の「弟子の解脱」で述べられている解脱体験は、シャンカラ自身の体験ということになる。師であるゴーヴィンダから教えを受けて、シャンカラ自身が解脱する過程が述べられていると考えることもできるが、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の著者の意図としては、師はシャンカラであり、弟子はパドマパーダ、スレーシユヴァラ、トータカ、ハスターマラカなどであろう。<sup>18</sup>

解脱体験は概念を超越しており、言語表現不可能である。実際に自分で体験するしかない。しかし、ウパニシャッド以来のインドの宗教哲学文献は、それを何とか言語表現しようと試みてきた。『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』はそのような文献の一つであるが、解脱論に関する他学派との複雑な論争を避け、美しい言葉を紡いで淡々と解脱の過程を説いている。他学派に対する批判書ではなく、シャンカラ派の帰依者に対する入門書である。

原文のサンスクリットは、一詩節が八音節四行のアヌシュトブ（シユローカ）や一音節四行のトリシュトブなどの韻文である。韻文なので、主語や動詞の省略があるが、理解するのに難解な箇所はあまりないが、現代語訳で解釈が分かれるところもある。<sup>19</sup> 本和訳は縦書きのため、読みやすさを考慮して本文中では、サンスクリットをカタカナ表記したところもある。註では、曖昧さを排除するためローマ字表記も用いた。底本として使用したのは次の刊本である。

Sriyangan 1910 = *Complete Works of Sri Sankaracharya in the Original Sanskrit: Vol. III, Upadesharachanavali*, Srirangam: Sri Vani Vilas Press, 1910. Revised ed. Chennai: Samata Books, 1983: 1-111.

さらに、次の刊本を参照した。

- Madhavananda 1921 = *Iṅvekacūdamani of Śrī Saṅkarācārya: Text with English Translation, Notes and an Index*, by Swami Madhavananda, Mayavati, Dt. Alomora, Himalayas: The Advaita Ashrama, Mayavati, 1921.
- Sankaranarayan 1973 = *Iṅvekacūdamani of Śrī Saṅkara Bhavagatpāda: with an English Translation of the Commentary in Sanskrit by Jagadguru Śrī Candrasekhara Bhāraṅ Svāminah (Śrī Saṅkarācārya of Śārada Pīṭha, Śringerī)*, Translator P. Sankaranarayanan, 1973, Sixth Edition, Mumbai: Bhavatiya Vidya Bhavam, 2019.
- Grimes 2004 = *The Iṅvekacūdamani of Saṅkarācārya Bhagavatpāda: An Introduction and Translation*, Translated and Edited by John Grimes, London and New York: Routledge, 2004.

## अनुप

- AAU = Adhyātmopaniṣad. *112 Upaniṣads: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation & Index of Verses*, Fifth Reprint Edition (First Ed. 2004), Vol. 2, Ed. by K. L. Joshi, O. N. Bimali, Bindiya Trivedi, Delhi: Parimal Publications, 2016: 308-314.
- ATU = Advaitārakopaniṣad. *112 Upaniṣads: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation & Index of Verses*, Fifth Reprint Edition (First Ed. 2004), Vol. 2, Ed. by K. L. Joshi, O. N. Bimali, Bindiya Trivedi, Delhi: Parimal Publications, 2016: 155-159.
- BĀU = Bṛhadāranyakopaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, ed. Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 29-165.
- BĀUbh = Bṛhadāranyakopaniṣadbhāṣya of Śaṅkara Ācārya. *Complete Works of Śrī Saṅkarācārya in the Original Sanskrit*:

- Vol. X, Brhadāranyakopaniṣad Bhāṣya*, Chennai: Samata Books, 1910.
- BhG = Bhagavadgītā. *The Bhagavadgītā as a Synthesis*, M. R. Yardi, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1991.
- Bhā = Bhāmānī of Vācaspati Miśra. *Bṛahmasūtra Śāṅkara Bhāṣya, With The Commentaries Bhāmānī, Kāṇḍarānu and Parimala*, And With Index Etc., Edited with notes etc., By Vedānta Viśārada Pandita Anatakriṣṇa Shastri And Vasudev Laxman Shastri Pansikar, Bombay, 1938. Repr. Varanasi: Krishnadas Academy, 2000.
- BhGBh = Bhagavadgītābhāṣya of Śāṅkara. *Complete Works of Sri Sankaracharya in the Original Sanskrit: Vol. VI, The Bhagavad-Gita Bhāṣya*, Srirangam: Sri Vani Vilas Press, 1910. Chennai: Samata Books, 1982.
- BSBh = Brahmasūtrabhāṣya or Śātrikramīmāṃsāsūtrabhāṣya of Śāṅkara Ācārya. *Complete Works of Sri Sankaracharya in the Original Sanskrit. Vol. VII, Bṛahmasūtra Bhāṣya*, Srirangam: Sri Vani Vilas Press, 1910. Repr. Chennai: Samata Books, 1983.
- CHU = Chāndogyopaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, ed. Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998. 166–287.
- GAD = Gūḍhārthadīpikā of Madhusūdhana Sarasvatī. *Śrīmadbhagavadgītā with the Commentaries Śrīmat-Śankarabhāṣya with Āṅandagīri; Nīlakanṭhī; Bhāṣyokoṣṭhadīpikā of Dhanapati; Śrīdhartī; Gītārthasangraha of Abhinavaguptācārya and Gūḍhārthadīpikā of Madhusūdhana with Gūḍhārtharatnāvaloka of Śrīdharmadattaśarma (Bachchāśarma)*, Edited by Vasudev Laxman Śāstrī Pansīkar, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd, 1996.
- KaivU = Kaivalyopaniṣad. *112 Upaniṣads: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation & Index of Verses*, Fifth Reprint Edition (First Ed. 2004), vol. 1, Ed. by K. L. Joshi, O. N. Bimali, Bindiya Trivedi, Delhi: Parimal Publications, 2016: 357–360.

- KaU = Kathopaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, ed. Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 372–403.
- KenU = Kenopaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, ed. Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 363–371.
- MĀUK = Māṇḍūkyaopaniṣatkārikā. *The Māṇḍūkyaopaniṣad with Gauḍapāda's Kārikā and Śaṅkara's Commentary*, Translated and Annotated by Swāmi Nikhilānanda with a Foreword by V. Subrahmanya Iyer, Mysore: Sri Ramakrishna Ashrama, 1936.
- MBh = Mahābhārata. *The Mahābhārata: the Udyogaparvan, being the Fifth Book of the Mahābhārata, the Great Epic of India*, vol. 6. Ed. S. K. De, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1940.
- MU = Muṇḍakopaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, ed. Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 434–455.
- NĀU = Nīrāṅbhopaniṣad. *112 Upaniṣads: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation & Index of Verses*, Fifth Reprint Edition (First Ed. 2004), Vol. 1, Ed. by K. L. Joshi, O. N. Bimali, Bindhya Trivedi, Delhi: Parimal Publications, 2016: 480–485.
- NBh = Nyāyabhāṣya of Vātsyāyana. *GautamīyaNyāyadarśana with Bhāṣya of Vātsyāyana*. Ed. Anantalal Thakur, Nyāyacaturgranthikā Vol. I, New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1997.
- NPu = Nāradaṇḍakopaniṣad. *112 Upaniṣads: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation & Index of Verses*, Fifth Reprint Edition (First Ed. 2004), Vol. 2, Ed. by K. L. Joshi, O. N. Bimali, Bindhya Trivedi, Delhi: Parimal Publications, 2016: 41–83.

- NrPU = Nisinhapurvatāpanīyopaniṣad. *Complete Works of Sri Sankarācharya in the Original Sanskrit: Vol. VIII, Commentaries on the Upanishads*, Srirangam: Sri Vani Vilas Press, 1910. Revised ed. Chennai: Samata Books, 1983: 763-910.
- NS = Nyāyasūtra of Gautama. *Die Nyāyasūtra's : Text, Übersetzung, Erläuterung und Glossar*. Ed. Walter Ruben, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, Band 18, No. 2, Leipzig, 1928.
- SN = Saṃyuktanikāya. *The Saṃyuta-Nikāya of the Sutta-Piṭaka, Part I-V, Sagāḥa-Igga*, ed. M. Léon Feer, London: The Pali Text Society, 1884, 1888, 1890, 1894 & 1898.
- ŚU = Śvetāśvaropaniṣad. *The Early Upanisads: Annotated Text and Translation*, ed. Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 413-433.
- TBU = Tejobindūpaniṣad. *112 Upanisads: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation & Index of Verses*, Fifth Reprint Edition (First Ed. 2004), vol. 1, Ed. by K. L. Joshi, O. N. Bimali, Bindiya Trivedi, Delhi: Parimal Publications, 2016: 498-531.
- TU = Taittirīyopaniṣad. *The Early Upanisads: Annotated Text and Translation*, ed. Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 288-313.
- TMU = Tripādvibhūti Mahānārāyaṇopaniṣad. [https://www.titindorancea.com/z/tripadvibhutumaha-narayana\\_upanishad\\_sanskrit\\_devanagari\\_with.htm](https://www.titindorancea.com/z/tripadvibhutumaha-narayana_upanishad_sanskrit_devanagari_with.htm).
- US = Upadeśasāhasī. *Śankara's Upadeśasāhasī: Critically Edited with Introduction and Indices*, by Sengaku Mayeda, Tokyo: The Sankho Press, 1973.
- VC = Vivekacūḍāmaṇi. *Complete Works of Sri Sankarācharya in the Original Sanskrit: Vol. III, Upadeśharachanavali*,

Srirangam: Sri Vani Vilas Press, 1910. Revised ed. Chennai: Samata Books, 1983: 1-111.

VSa = Vedantasāra. *Vedantasāra of Sadananda: With Introduction, Text, English Translation and Comments* by Swami Nikhilananda. Mayavati, Almora. Himalayas: Advaita Ashrama, 1931.

VU = Vāṛāḥopaniṣad. *112 Upaniṣads: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation & Index of Verses*, Fifth Reprint Edition (First Ed. 2004), vol. 2, Ed. by K. L. Joshi, O. N. Bimali, Bindiya Trivedi, Delhi: Parimal Publications, 2016: 432-455.

YS = Yogasūtra. *Paṭaṅjalayogasūtrāṇi*, ed. Kāśinātha Śāstri Āgāse, Anadāśramasamskṛtagraṅthāvalih 47, Poona: Anadāśramamudraṅālaya, 1904.

## 構成<sup>20</sup>

帰依文	1
序論	1-5
アートマンの覚知	6-10
弁別(ヴィチャラ)	11-13
有資格者(アディカーリン)	14-31
誠信(バクテイ)	32-49
輪廻とは何か	50-70
解脱の直接原因	71-72
アートマンでないもの	73-125

最高のアートマン	一二六～一三八
輪廻の原因	一三九～一五〇
五つの蔵	一五一～一五五
食物所成の蔵	一五六～一六六
生気所成の蔵	一六七～一六八
意所成の蔵	一六九～一八五
知識所成の蔵	一八六～二〇八
歡喜所成の蔵	二〇九～二一一
アートマン	二一二～二二四
ブラフマン	二二五～二四二
「あなたはそれである」という梵我一如	二四三～二六七
潜勢力（ヴァーサナー）	二六八～二七七
付託（アディヤーサ）	二七八～二八六
身体	二八七～二九八
自我（アハンカラー）	二九九～三一一
潜勢力と輪廻	三一二～三二一
放逸（プラマード）	三二二～三二九
相対性	三三〇～三三四
感官の対象	三三五～三四一

無分別三昧	三四二～三六七
瞑想（ヨーガ）	三六八～三七二
離欲（ヴァイラーグヤ）	三七三～三七八
瞑想の対象	三七九～三八五
唯一のアートマン	三八六～三九九
唯一の实在	四〇〇～四〇八
ブラフマンの体験	四〇九～四二六
現生解脱者（ジーヴァンムクタ）	四二七～四四五
効果を發揮し始めた業（プラーラブダ）	四四六～四六四
唯一不二のブラフマン	四六五～四七三
認識手段	四七四～四七九
弟子の解脱	四八〇～五二〇
ブラフマンの覚知	五二一～五六九
勝義（最高の真理）	五七〇～五七八
結論	五七九～五八一

## 和 訳

### 識別の宝冠

#### 〔帰依文〕

一 最高の歓喜そのものであり、真実の師（サドグル）であり、すべてのヴェーダーンタの定説を対象とする人であり、その〔言葉としての〕対象を超越している人であるゴーヴィンダに、私（シャンカラ）は帰依する。

#### 〔序論〕

二 生物のなかで、人間として生まれることは得難い。それよりも男として〔生まれることはさらに得難いの〕である。それよりも婆羅門（ヴィプラター）として〔生まれることはさらに得難いの〕である。それよりもヴェーダ聖典の宗教的義務（ダルマ）の道に専念すること〔はさらに得難いの〕である。それよりも最高のもの（ブラフマン）を知ること〔はさらに得難いの〕である。その後で、人はアートマン（魂）とアートマンでないもの（身体）とを識別し、直接体験し、ブラフマン（梵）そのものに完全になる。解脱は、十億<sup>21</sup>の出生のなかで徳を積むことなしには得られない。

三 得難いことが三つある。男として生まれること、解脱を求めること、偉大な人（師）に弟子入りすることである。それらは神の恩寵を原因として持つ。

四 何とかして、得難い人間としての出生を得て、さらに男性として（生まれ）、聖典を研究し尽くしているにもか

かわらず、自分自身の解脱のために努力しない愚者は、自殺者である。なぜなら、彼は虚偽なものに執着することによって、自分を殺しているからである。

五 得難い人間として〔誕生し〕、男性の身体を得ているのに、自分（人間）の目的に対して怠っている人より愚かな人がいるだろうか。

〔アートマンの覚知〕

六 たとえ、ブラフマー神の一生を百回分の時間で、論書を唱え、神々に供犠し、祭式行為を実施し、神々に礼拝するとしても、その人自身とアートマンとの同一性の覚知（ボータ）なしに解脱は完成しない。

七 「財宝による不死（解脱）の望みはない」<sup>24</sup>とそのように天啓聖典は言う。それ（天啓聖典）ゆえ、祭式行為が解脱の原因ではないことは明白である。

八 それゆえ、賢者は外界の対象である楽に対する熱望を捨てて、解脱のために努力すべきである。真理を知る偉大な終末（解脱）の指導者を訪ねて、彼の教説の意味（梵我一如）に自分の精神を集中（瞑想）すべきである。<sup>25</sup>

九 輪廻の大海に沈没した人は、自分で自分を救済しなければならぬ。彼は正しく認識し続けることによって、ヨーガに登った人となる。<sup>26</sup>

一〇 現生の束縛から解放されるためには、すべての祭式行為を捨て、賢者や学識者を訪ねて、アートマン（体得のため）の実修を努力すべきである。

〔弁別（ヴィチャラ）〕

一一 祭式行為は、心（チッタ）の浄化のためのものであり、実在するもの（ブラフマン）の認識のためではない。弁別<sup>28</sup>によって、実在するものの〔認識の〕成立がある。祭式行為を何千万回<sup>29</sup>しようとも少しもない。

一二 正しい弁別から、縄が実在することが確認できる。それによって、迷妄によって生じた蛇の〔認識から生じる〕大きな恐怖と苦しみが消滅する。<sup>30</sup>

一三 対象の決定は、有益な教説<sup>31</sup>に即した弁別によることが経験されている。沐浴や布施や何百回もの調気<sup>32</sup>によってではない。

〔有資格者（アディカーリン）〕

一四 結果（解脱）の成就是、特に有資格者<sup>33</sup>に望みがある。それ（資格）があるとき、場所や時間などの工夫は補助的な要因である。

一五 それゆえ、アートマンが実在することを知りたい者は、慈悲の大海であり、ブラフマンを知る者であり、最高の人である師（ゲル）に近づいて、弁別すべきである。

一六 知力と知識を持つ人、肯定的推理と否定的推理によって弁別できる人、「以上の」述べられた特徴の認められる人が、アートマンの知識に対する有資格者である。

一七 識別知を持ち、離欲しており、寂靜などの属性<sup>34</sup>を具え、解脱を求める人には、ブラフマンを希求する潜在能力があると考えられる。

一八 これ（解脱）に対して、賢者たちは四つの成立手段（識別知、離欲、寂靜、解脱願望）を語っている。それらが存在しているときにのみ、「その人に」実在するもの（ブラフマン）が完成する。それらが存在しないとき、「ブラフマンは」成立しない。

一九 最初に、常住なもの（アートマン）と無常なもの（非アートマン）とが識別（ヴィヴェーカ）されるべきである。次に、現生と来生における〔行為の〕結果（業）の享受に対して離欲（ヴァイラーグヤ）すべきである。<sup>35</sup>

二〇 「次に」寂靜など六つ〔の属性<sup>36</sup>〕を具えていること、「次に」解脱を求めること。それが明白であれば、「ブラフマンは真実であり、世界は虚妄である<sup>37</sup>」という特徴を確信できる。

二一 まさにそれが、常住なもの（アートマン）と無常なもの（非アートマン）との識別として言及されている。離欲とは、見ることや聞くことなどによるもの（認識対象）すべてに対する嫌悪感である。

二二 それ（離欲）は身体から始まりブラフマー神（梵天）に至る、無常な享受の対象に対して（の嫌悪感）である。  
〔対象には〕過失のあることを繰り返し返し観察して、多様な対象から離れること。

二三 「そして」自分の対象（ブラフマン）<sup>39</sup>に心（マナス）が常に安住することが、寂静（シヤマ）であると言われてい  
る。「心を」諸々の対象から引き揚げて、<sup>40</sup>それぞれの位置に固定させる<sup>41</sup>。

二四 両方の諸器官のそれは、自己制御（タマ）と称せられる。「心の」働きを外界の対象から離すこと、これが最  
高の平静（ウバラティ）である。

二五 まず、すべての苦に反応せずに、そして心配することなく、悲しむことなく耐えること。それは忍耐（ティテ  
イクシャー）と呼ばれる。

二六 論書と師（グル）の言葉は真実であると心（ブッディ）によって確信すること、それは信仰（シユラッター）で  
あると善人たちによって語られる。それによって、人は実在しているものを知覚する。

二七 心（ブッディ）<sup>43</sup>が清浄なブラフマンに常に固定されていること、それは精神集中（サマーターナ）と言われる。  
しかし、心の戯れはそうではない。

二八 自我意識<sup>44</sup>から始まり身体に至る、無知によって虚妄分別されたものの束縛から、<sup>45</sup>自分自身の本質を悟ること

によって、解放されたいという願望が、解脱願望（ムムクシユター）である。

二九 たとえ「その解脱願望が」弱く平凡であっても、離欲や寂靜などによって、また師からの恩恵（プラサーダ）によって、まさにそれ（解脱願望）は強くなり、結果を絞り出す。

三〇 離欲と解脱願望とが強い者にのみ、寂靜などは意味を持ち、結果を持つだろう。

三一 離欲と解脱願望の二つが弱いなら、砂漠における水（蜃気楼）のように、「寂靜などは光線（効果のないもの）に過ぎない。

〔誠信（バクテイ）〕

三二 解脱の手段の原因総体のなかでは、誠信（バクテイ）<sup>47</sup>が極めて重要である。「誠信とは各自の本質（アートマン）に心を定めることである」<sup>48</sup>と説明されている。<sup>49</sup>

三三 他の者たちも〔同様に〕、「誠信とは自らのアートマンの真理<sup>50</sup>に心を定めることである」と唱えている。既述の手段<sup>51</sup>を具えており、アートマンの真理を知りたい者がいる。

三四 そうであれば、彼（アートマンの真理を知りたい者）は束縛（輪廻）から解脱するための智慧を持つ師（ゲル）のもとに行かねばならない。天啓聖典に精通しており、悪業なく、欲望にまみれておらず、ブラフマンを知る者のなか

で最高の者である〔師のもとに〕。

三五 「師は」ブラフマンのなかで平静であり、燃料が燃え尽きた火のように寂滅しており、無条件の慈悲の川のようにであり、「師に」帰依する善人たちの親族のようである。

三六 誠信を持ってその師に礼拝し、お辞儀と恭順さと奉仕によって師を満足させて、師に近づいて、アートマンに関して知るべきことを彼（アートマンの真理を知りたい者）は次のように質問すべきである。

〔弟子は言った〕

三七 神（スヴァーミン）よ、帰依する人々の親族のようなお方よ、慈悲の川のようなお方よ、私はあなたに帰依します。現生の川に落ちた私をあなたは救い出してください。御自身の目で「私を」直視することによって、大きな慈悲の甘露（スダー）を「私に」降り注ぐことによつて。

三八 消すことが困難な輪廻という山火事の火に焼かれる者を、不可見力（業）という困難な風によって激しく揺れる者を、恐怖に陥った者を、「あなたという」帰依処にやつて来た者を、「神である」あなたは死から守ってください。私は他の帰依処を知りません。

三九 寂靜で偉大な「アートマンの」真理を知る人々がおられます<sup>54</sup>。彼らは春のような世界の安寧（ローカヒタ）をもたらしません。彼らは独力で恐ろしい現生の川を渡っており、無条件で他の人々をもまた渡らせます。

四〇 これが偉大な魂を持つ者たちの本質であり、まさに自ずと他人の苦しみの除去に向かうのです。周知の如く、月が自ずと太陽の激しい光に焼かれた大地を守るように。

四一 神（ブラブ）よ、ブラフマンの歓喜の精髓の経験によって効果を増す、あなたの唇から流れ出る、耳に心地よい、満ち足りた量の冷たく輝く甘露（不死）の言葉を、あなたは山火事で燃えさかる炎のように現生で苦しむ者にかけてください。あなたから眼を一瞬でも向けられた乞食者は、あなたからの恵み（甘露の言葉）を自分のものにします。

四二 どうやって私はこの現生の川を渡ればよいのですか。私の行くべき道はどれですか。どのような手段があるのかを私はまったく知りません。神（ブラブ）よ、あなたは慈悲によって私を守ってください。あなたは私の輪廻の苦しみを滅してください。

〔以上、弟子は言った〕

四三 以上のように、自分の帰依処を求めて来た者（弟子）は語る。彼は燃え盛る山火事の熱のような輪廻に苦しんでいる。偉大な魂を持つ者（師）は、優しい慈悲の眼で彼を見つめて、直ちに無畏を与えるだろう。

四四 解脱を求め、聖典の規定によく従い、心〔作用〕が寂滅しており、<sup>57</sup> 寂静（シャマ）を具えて教えを求めてやって来る者に、その賢者（師）は慈悲を持って〔アートマンの〕<sup>58</sup> 真理を教説する。

〔師は言った〕

四五 賢者（弟子）よ、畏れるな。あなたには終末（死）がなく、輪廻の川を渡る手段がある。それによってのみ苦行者たちが彼岸に至る、まさにその道（手段）をわたしはあなたに教説しよう。

四六 輪廻の恐怖をなくす、ある最高の手段がある。それによって、あなたは現生の川を渡り、最高の歓喜を得るだろう。

四七 ヴェーダーンタの<sup>59</sup>意味を弁別することによって、最高の知識が生じる。それによって、輪廻の苦しみは完全に滅す。

四八 信仰（シユラッター）、誠信（バクテイ）、静慮（ディヤーナ）、瞑想（ヨーガ）は解脱を求める者にとって、解脱の直接原因であると天啓聖典の言葉は語る。<sup>60</sup>まさにそれらのなかで生きる者は、無明によって虚妄分別された身体の束縛<sup>61</sup>から、解脱する。

四九 無知と結合しているから、あなたは最高のアートマンであるにもかかわらず、アートマンでないもの（身体）に束縛されており、まさにそれゆえ輪廻する。この二つ（アートマンと非アートマン）を識別して生じた覚知の火は、無知によって作られたもの（業）を根こそぎ焼き尽くすだろう。<sup>62</sup>

〔輪廻とは何か〕

弟子は言った。

五〇 神よ、私の質問を哀れみとともに聞いてください。あなたの口から答えを聞けば、私は目的<sup>63</sup>を達成するでしょう。

五一 束縛（輪廻）とは一体何でしょうか。それはどのようにやって来るのでしょうか。どのように存在し続けるのでしょうか。どうすれば「束縛から」解放されるのでしょうか。このアトマンでないものは何でしょうか。最高のアトマンとは何でしょうか。この二つ（アトマンと非アトマン）の識別はどのようにすればよいのでしょうか。それらを教えてほしいのです。

師は言った。

五二 あなた（弟子）は神の恩寵が与えられている。あなたはなすべきことをなした。あなたは自分の一族を浄化した。あなたは無明による足枷（束縛）から解放されることによって、ブラフマンになることを望んでいる。

五三 借金から解放させる者として、父親には息子などがいる。しかし束縛から解放させる者は、自分以外誰もいない。

五四 頭に置かれた荷物などによる苦痛は、他人によって除去される。しかし飢えなどによって作られた苦しきは、自分以外の誰によっても除去されない。

五五 病人が健康に良い食事をし、そして薬を服用すると、当人に健康の回復が見られる。他人によってなされた

行為によってではない。

五六 実在しているそのものは、自分だけの明瞭な覚知の眼によって知られるのであり、「他人である」賢者〔の教え〕によってではない。月そのものは、自分の眼によってのみ知られるのである。他人によって、一体何が知られようか。

五七 無明、欲望、業などという繩による束縛を、たとえ四三二京年<sup>65</sup>かけたとしても、自分以外の一体誰が解き放すことができるだろうか。

五八 実践（ヨーガ）によっても、理論（サーンキヤ）によっても、<sup>66</sup>祭式行為によっても、知識（ヴィドゥヤー）によっても、<sup>67</sup>〔束縛を解放〕できない。梵我一如の悟りによって、<sup>68</sup>解脱は成立する。他の道はない。

五九 ヴィーナ（琵琶）の美しい姿と卓越した演奏技術は、人々を喜ばせるだけである。それは国を統治するためには相応しくない。

六〇 明瞭な発音、流暢な言葉、論書の巧みな解説、そのような学識者の博識は、享受する（聞いて楽しむ）ためのものであり、解脱するためのものではない。

六一 最高の真理<sup>69</sup>が知られないとすれば、論書の研究は無益である。最高の真理がすでに知られていれば、論書の

研究は無益である。

六二 「論書は」言葉の網であり、深い森であり、心を迷わす原因である。それゆえ真理を知ろうとする者は努力して、アートマンの真理を知るべきである。<sup>70</sup>

六三 無知という蛇に噛まれた人の薬は、ブラフマンの知識だけである。ヴェーダ、論書、呪文（マントラ）がどうして薬になるうか。

六四 「薬を」飲まずに、薬の名前を発声することによって病気が治ることはない。「ブラフマンの」直接体験なしで、「ブラフマン」と発声することによって解脱することはない。

六五 知覚対象を消滅させずに、アートマンの真理を知らずに、「ブラフマン」と発声することによって、どうして人は解脱するのか。「発声の」結果は音声のみである。<sup>71</sup>

六六 敵を減ぼさずに、すべての土地と富を獲得せずに、「私は王である」という宣言によって、王になることはできない。<sup>72</sup>

六七 たとえば、埋蔵宝を手に入れるには、信頼できる（場所を知っている）人の言葉、採掘、「宝の」上にある石の除去が必要であり、「宝の名前を」呼んでも、「宝は」外に現れない。そのように幻（マヤー）<sup>72</sup>によって隠された、自

らの汚れなき真実は、ブラフマンの知識の教説、推理、瞑想などによって得られるのであり、<sup>73</sup>難解な論理によってではない。

六八 それゆえ、病気などの〔場合の〕ように、賢者たちは自分だけで、あらゆる努力（プラヤトナ）を手段として現生の束縛からの解放のために努力（ヤトナ）すべきである。<sup>74</sup>

六九 きょう、あなたが質問した内容は、論書を知る者が考えたすばらしいものである。経典にも似ており、その秘密の意味を、解脱願望者たちは知るべきである。

七〇 賢者（弟子）よ、注意深く聞きなさい。私が言うことを聞くことによって、あなたは現生の束縛（輪廻）から直ちに解放されるだろう。

#### 〔解脱の直接原因〕

七一 解脱の第一の原因は、無常な事物に対する完全な離欲であると言われている。それから寂靜、自己制御、忍耐、それから執着<sup>75</sup>に基づくすべての行為の完全な放棄である。<sup>76</sup>

七二 それから、天啓聖典を聞き、それを推理し、沈黙の聖者のように真理を長時間、絶え間なく瞑想する。それから、賢者は無分別の最高の状態に至り、まさに現生で涅槃の樂を得る。<sup>78</sup>〔続く〕

## 註

- 1 Srirangan 1910の奥付ではシヤンカラ作となっている。iti śrīmaparamahansa-parivṛājakācāryasya śrīgovindabhagavapūjyapādāśiṣyasya śrīmacchankarabhagavatāḥ kṛtā vivēkaśūdanānīḥ samāptāḥ 二「以上、聖なる最高の苦行者、遊行者、阿闍梨であり、聖ゴウヴィンダ・バガヴァット・プージュヤパターダの弟子である聖シヤンカラ・バガヴァット作『識別の宝冠』完。ゴウヴィンダ (670-720頃) は初代シヤンカラ師の師。
- 2 中村元『シヤンカラの思想』(インド哲学思想五、岩波書店、一九八九a) 七二
- 3 M. Comas, *Extracting the Essence of the Śruti*, New Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1996.
- 4 VC 427-445参照。
- 5 「知行併合論」(jñānakarmasamuccayavāda) は解脱の手段を、知識のみ、行為のみ、知識と行為の併合のうちのどれなのかについての議論。知識は理想としてのヨーガによって発生する知識を、行為は祭式行為を意味する。
- 6 VC 6-11など参照。
- 7 VC 32註参照。
- 8 VC 48.
- 9 VC 154註, 413, 466参照。
- 10 <https://archive.org/details/vivekachudamani-bhashya/page/n3/mode/2up>. 英訳がある。Sankaranarayan 1973.
- 11 adhyātman という言葉に関しては上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』(岩波文庫、一九九二) 一七八参照。『アディアートマ・ウパニシャッド』の成立年代に関しては、シヤンカラもしくはシヤンカラの直弟子よりすこし遅い人によって著された Vakyaviti (文章の註釈) に引用されているので八〇〇年以前ということになる。
- 12 中村一九八九a: 七二
- 13 AAUの刊本では七一詩節を数えているが、最初と最後の散文部分は詩節に数える必要はなく、全七〇詩節である。
- 14 VC 465-471.
- 15 中村一九八九a: 七二-七三
- 16 VC 2, 17, 19, 21, 49, 73など参照。なお、『サンユッタ・ニカーヤ』(Sanyuttanikāya) では viveka は「遠離、苦から離れること」。SN

- 1.1.1.2: jānāmi khvāhaṃ āvuso satānaṃ ninoḥkhaṃ pamokkhaṃ vivekaṃ ti 「友よ、人々の解脱を、解脱させることを、(苦から) 離れることを、実に私は知っている」。中村元訳『ブッダ神々との対話・サンユッタ・ニカーヤ』(岩波文庫、一九八六) 一五、二二七参照。
- 17 VC 2:43-267参照。
- 18 シャンカラの弟子については、前田專学『ヴェエターンタの哲学』(平楽寺書店、一九八〇) 七三―七四参照。
- 19 VC 1:49, 265, 350, 541, 551など。
- 20 詩節の区切りは *Sṛiṅgaṃ* 1910版に従う。
- 21 百 (*sata*) × 一千万 (*koṭi*) 回。
- 22 「目的」(*artha*)。人間の目的。シャンカラはバーダラーヤナの言説として、アートマンの知識から人間の目的は成立すると言う。  
*BSBh ad BS 3.4.1: asmād vedāntavihitād āmajānātī svāntāt puruṣārthāḥ siddhyatī bādārāyaṇācāryo manyate* 「[これから] (とはつまり)、ヴェエターンタの聖典命令であるアートマンの知識から[祭式行為から] 独立して、人間の目的が成立するとバーダラーヤナ・アーチャールヤは考える」。人間の目的は解脱。*Bhā ad BS 3.4.1: apavargākyapurusaṛthasāhanāmajānāparatvam* … 「[人間の目的を成立させるものは] 解脱という人間の目的の手段であるアートマンの知識が主である」。
- 23 プラフマー神の一昼(半日)が一カルパ(劫)。一カルパは人間世界の四三億二千万年に相当する。プラフマー神の一年は三六〇日だが、昼と夜とで七二〇カルパになる。プラフマー神の一生は百年で、七万二千万カルパ。四三億二千万年×七万二千万カルパ＝三百一兆四百億年。それが百回なので、三京百十四兆年。
- 24 VC 7: amṛtavyasya nāsāsū vitenety eva hi sṛuṅhī || BĀU 2:42 = BĀU 4:5:3: amṛtavyasya tu nāsāsū viteneti || 「しかし財宝による不死の望みはない」。天啓聖典によれば、解脱の原因はアートマンを知ることであり、財宝や祭式行為ではない。VC 7註参照。
- 25 「真理を知る(者を)」(*saṃtam*)。動詞語根 *as* の現在分詞 *sat* には、存在している、善い、真理などの意味があるが、ここでは *MuU 1.2.1-1.3* の文脈に従って、真理と解釈した。*MuU 1.2.1: satyākāmāḥ* … 「真理を愛するものたち」*MuU 1.2.1.3: aksaram punasam veda satyam* … 「不滅のプルシヤという真理の知識」。真理とはプラフマンのこと。VC 39註、VC 44註参照。
- 26 *BhG 6.4: yadā hi nendriyārtheṣu na karmasu anusajātē | sarvasaṃkalpasamyāsi yogārthas tadocyate* || 「実に、感官の対象と行為に執着せず、すべての意志を放棄した人は、ヨーガに登った人と言われる」参照。
- 27 *BhG 6.12: tatraikāgraṃ manah kṛtvā yatचित्न्द्रiyakriyāḥ | upaviśāsāna yujīyād yogam āmavisuddhaye* || 「そ」(清浄な場所) で、一意

専心し、心と感官の働きを制御し、ヨーガを実修すべきである。内官の浄化のために。『ヴィヴェーカ・チューターマニ』では浄化の手段は儀式行為であると言われているが、『バガヴァッド・ギーター』では浄化の手段は瞑想としてのヨーガである。シャンカラは浄化されるアートマンを内官と註釈する。BhGBh ad BhG.12. ātmavīśuddhaye antahkaranasya viśuddhyartha ity'etat 二「アートマンの浄化のためとは、内官の浄化のためという意味である」。BhG.5.7.11では内官の浄化の手段は、結果を期待しない行為であるカルマ・ヨーガである。このヨーガの意味は手段であり、行為という手段という意味になる。VCでは、śuddha と viśuddha とは同義であり、訳し分けなかったが、不浄なものが清浄になるとときには「浄化」、清浄である状態のときには「清浄」と訳した。浄化は、感覚器官 (buddhindriya) に対して、そして思考器官 (manas) である内官 (antahkaraṇa) に対して行われる。感覚器官は外界の対象を認識し、内官は観念や概念など内的なものを対象とする。内官と意と心 (citta) は同義。シャンカラはサットヴァも内官と註釈する。

BhGBh ad BhG 16.1: satvasamsuddhīḥ satvasy'antahkaranasya samvyavahāreṣu paravañcānamāyāntīrādīparīvarjanam śuddhahāvena vyavahāra ity'arthah 二「サットヴァ (心) の浄化」とはサットヴァの、つまり内官の、諸々の活動のなかで他人の欺瞞や幻や虚位などから離れた、浄化された状態による働きという意味である」参照。マドゥスータナは「サットヴァの浄化」は内官の汚物が減すること (GAD ad BhG 16.1: satvasy'antahkaranasya śuddhir nirmalata) と言ふ。『ヴェーダーンタ・サラー』(VS 6, 13) は「感官の浄化」(buddhisuddhi) は悪業 (kaṁśa) の滅であり、その手段は日常行為 (nitya) などの祭祀行為であると云う。

28 ここでの弁別 (vicāra) は書名になっている識別 (viveka) と同義のようである。VC 12で繩と蛇との弁別、つまり識別が言われている。

29 「何千万回」。原語の koṭi は一千万の意味。

30 繩と蛇の譬えについて、シャンカラは次のように言ふ。BhUBh ad BĀU 4.4.6: tasmād avidyānīyīmātre mokṣavyavahāra itī cāvocāma | yathā rajīvādau sarpaśyājñānānīyītau sarpaśmītyīriti 二「それゆえ、無知が滅したときのみ、解脱と言語表現されるとわれわれは言う。たとえば、繩などに対して、蛇などという誤知が滅したときに、蛇などが減するやうに」。

31 「有益な教説」(hiokh)。VC 15の「師 (タル)」の言葉であると思われる。

32 「調気」(pṛāṇāyama)。YS 2.49: tasmīn satī śvāsapras'āsayor gatvī'chedah pṛāṇāyamah 二「その (座法が完成したところ) で、調気とは入息と出息を断つことである」参照。

33 「有資格者」(adhikārin) は『ヴェーダーンタサラー』では次のように言われている。VSā 6: adhikārī tu vidhivadadhāvedavedāṅga-

tenpatato 'dhigataklhavedarho 'smin jammami jammantare vā kāmyaniśiddhavarjanapurāṣaram nityanamitkaprāyāscittopāsanaṣhanena nigatankhikakamaśrayā nītanānmalasvāntāḥ sādhanacetuśvyaśampannāḥ pramāṭā 〓「また有資格者とは、聖典命令に従ってヴェーダとヴェーダ補助学とを研究し、すべてのヴェーダの意味を直ちに体得し、〔さらに〕現生でもしくは前生で選択行為と禁止規定とを離れた後で、日常行為と臨時行為と滅罪と念想を実行することによって、すべての悪業が消滅することによって、とても清浄な心となり、〔さらに〕四種類の〔解脱獲得〕手段を具えた、正しい認識者である。」「手段」は次のように言われる。Vśā 15: sādhanāni nityāni-tyastuvivekēhāmūrtārāphalābhagavirāgeśamāśīkśasampattimukṣuvāni 〓「手段とは、常住なものと無常なものの識別、現生と来生における利益と結果の享受に対する離欲、寂靜など六つのもの具足、解脱に対する意欲である」。

34 「寂靜などの属性」。VC 84 「満足、慈悲、忍耐、正直、寂靜、自制」、Vśā 18: śanādayas tu śamadamoparatitkśasamādhanaśradhā-khyāḥ 〓「また寂靜なことは、寂靜、自己制御、平靜、忍耐、専心、信仰と称するものである」参照。中村元「ヴェーダ・タントラ思想の展開」(中村元選集「決定版」第二七卷、春秋社、一九九六)一九五―二九八、三三七―三四〇参照。

35 VC 19-24の詩節の区切り方は編者によって異なる。Madhavanada 1921やGrimes 2004は内容で区切っているが、ここでは底本に従って詩節(アヌシュトッブ、シユローカ)の形式(八音節×四行 〓 三二音節)で区切ることにした。

36 「寂靜など六つの〔属性〕」。VC 17註参照。

37 VC 20c: brahma satyaṃ jagan mithyety ... 〓 NĀU 35: tapa iti ca brahma satyaṃ jagan mithyety aparokṣaṅganāginā 〓「苦行とはブラフマンは真実であり、世界は虚妄であるという直接知の火によること(業を燃やすこと)である」。

38 「過失」(dosa)は、「ニヤーヤ・ストトラ」では貪欲(rāga)・嫌悪(dveṣa)・無知(moha)という煩惱。NS 4.1.3: tat trairāśyaṃ rāgadvēśamoharthantarābhāvāt 〓「それ(過失)は、三つの集まりを持つ。貪欲・嫌悪・無知は〔それぞれ〕別のものであるから」。NBh ad NS 4.1.3: teśāṃ dośānāṃ trayo rāsāyas trayāḥ pakṣāḥ | tatra rāgapakṣāḥ kāmo matsarāḥ spṛhā tṣṇā lobhā iti | dveṣapakṣāḥ krodhā tṣyā asūyā droho 'maṣa iti | mohapakṣo mithyāñānaṃ vicikīṣā māñāḥ pramāḍa iti 〓「これらの過失には、三つの集まり、部類がある。そのうち、貪欲の部類は、愛欲・羨望・熱望・渴愛・貪愛である。嫌悪の部類は、怒り・嫉妬・不平・敵意・不忍である。無知の部類は、誤知・疑惑・慢心・怠慢である」。

39 「対象」(viśaya)。ブラフマンを対象、目的とする。

40 BhG 2.58: yadā samharate cāyaṃ kūrho ṅaṅāva sarvaśah | indriyaṅindriyārthebhyas tasya prajāñā prāśiñhātā 〓「亀が肢体をすべて収める+

うに、人が感官の対象から感官をすべて収めるとき、その人の智慧は安住する」参照。

41 「位置」(golaka) は *Madhavanada* 1921 では centres と訳されている。前田一九八〇：一四七では「感官の穴 (golaka)」。

42 「両方の諸器官」。耳、皮膚、眼、鼻、舌の認識器官(感官)と口、手、足、排泄器、生殖器の行為器官。VC 94参照。

43 こでの「心(ブッディ)」は VC 23 の「心(マナス)」と同義。VC 23 「自分の対象(ブラフマン)に心(マナス)が常に安住するこ」= VC 27 「心(ブッディ)が清浄なブラフマンに常に固定されているこ」。

44 「自我意識」(ahankara) とは「私は身体である」「身体は私のものである」などの自我に執着する意識のこと。シャンカラの自我意識については、中村一九八九a：五三三―五三六、島岩「シャンカラ」(清水書院、二〇〇二) 一〇九―一二二参照。

45 「虚妄分別」(kalpita)。実在を相対化し概念化すること。概念は非実在であり、虚妄である。vikalpa, kalpanā, parikalpita などとも別を意味する。

46 「寂静な心」。VC 17註参照。

47 「誠信(バクテヤ)」。BhG 11.55: makarmakm maiparamo madhaktah sangavarijah | nirvairah sarvabhutesu yah sa mam eti pāṇḍava|| 「私のための行為をなし、私に専念し、私を誠信し、執着を離れ、すべてのものに対して敵意のない者、彼は私に至る。パーンダヴァよ」参照。誠信 (bhakti) に関しては、シャンカラはヴィシュヌ神に対する誠信を説く BhG 11.55 を 『バガヴァッド・ギーター』の精髓 (sāra) であると云う。BhGBh ad BhG 11.55: sarvasya gītāsāstrasya sārabhūtaḥ … 「すべての『バガヴァッド』ギーター』の論書の精髓」参照。『バガヴァッド・ギーター』6.10, 9.34, 18.65 などでは、誠信とはヴィシュヌ神に専念、専心し、自らのアートマンをヴィシュヌ神と結びつけることであると言われる。しかし、シャンカラは自らの思想の典拠をウパニシャッドに求め、バクテイには注意を払わなかったと言われる。前田一九八〇：七二参照。VC 26 では誠信(バクテイ)は、解脱の直接原因であることが肯定されている。なお、中村一九九六：四二九によれば、シャンカラのバクテイ (bhakti) は、「それに」専念する」という意味。

48 ここの本質 (svarūpa) とはアートマン (ātman) のこと。VC 32c (svasvarūpānusandhānam bhaktir itī …) は VU 2.32a (svasvarūpānusandhānam nityantam sarvasakṣīnam | 「各自の本質に心を定めることによって、すべての目撃者として踊っている者を」瞑想すると解脱する) と同じ文章であるが、VU は誠信 (bhakti) の定義ではなく瞑想の説明。

49 VC 32-35 も内容ではなく詩節で区切った。

50 「アートマンの真理」。アートマンは、人間の本质であり、実在であり、ブラフマンと不二元。したがって、アートマンの真理と

は梵我一如。

- 51 「既述の手段」。VC 18で言われている「四つの成立手段」(識別知、離欲、寂靜、解脱願望)。
- 52 「燃料が燃え尽きた火」の喩えについては ŚU 6.19: *nīśkalān nīśkriyān śāntān niravadyān nirāñjanān | amṛtasya paraṃ setuṃ dagdhendhānān ivānalām* 「彼(大自在神)は、部分なく、活動せず、寂靜であり、欠点なく、汚れなく、燃料を燃やした火のようであり、不死への最高の架け橋である」参照。
- 53 「寂靜で……人々がおられます」。MuU 1.2.11: *tapāśīśradhā ye hy upavasānty arāṅye śāntā vidvānsō bhāṅsacaryām carantāḥ | sūryadvāreṇa te virājāḥ prayānti yatraṃrītāḥ sa puruṣo hy avyayātmā* 「森のなかで苦行と信仰に生き、寂靜で食を行つ賢者たちがいる。彼らは離欲者となり、太陽の門を通り、かの不死のブルシヤ、不壊のアートマンのいるところに行く」参照。
- 54 「真理を知る人々」(samāh)。VC 8註参照。
- 55 「道」(gati)。VC 45「道(手段)」(mārga) 参照。
- 56 「手段」(upāya)。解脱の手段。VC 45-49参照。
- 57 「心(作用)が寂滅」。VC 369註参照。
- 58 VC 44: *vidyān sa tasmā upasatīm tyuse mumukṣave sādhu yathoktakārine | praśāntacittāya śānānviāya tattvopadeśān kṛpayāva kuryāt* 卍 MuU 1.2.13: *tasmāi sa vidvān upasānāya samyak praśāntacittāya śānānviāya | yenāksaram puruṣān veda satyān provāca tam tatvavāo brahmavidyān* 「その賢者は、心は寂滅しており、寂靜を具え、正しい態度で近づいて来た者に、それによって知った不滅のブルシヤの真理の知識、かのブラフマンの知識を如実に語った」。
- 59 「ヴェエターンタ」。ここでは、天啓聖典であるウパニシャッドのことであると思われる。
- 60 VC 48: *śradhābhaktidhyanāyogān munukṣor mukter hetūn vakti sāksāc chruter gṛh* 卍 KaivU 2: *tasmāi sa hovāca pīṭmāhaś ca śradhābhaktidhyanāyogād avāh* 「彼に祖父は言った。『信仰と誠信と靜慮と瞑想だから、あなたは(解脱の手段を)知るべきである』」。
- 61 「無明によって虚妄分別された身体の束縛から」。VC 8 「無知によって虚妄分別されたものの束縛から」参照。
- 62 知識の火が業を燃やす例については BhG 4.37: *yathādhānsi samiddho 'gnir bhasmasākurute 'jīna | jñānāgniḥ sarvakarmāṇi bhasmasākurute tāhā* 「たゞえば、燃火が薪を完全に灰にするように、アルジュナよ、知識の火はすべての業を完全に灰にする」参照。

- 63 「目的」(artha)。人間の目的。解脱。VC 5註参照。
- 64 「アートマンでないもの」。身体のこと。VC 49参照。
- 65 「四三三千年」。四三億二〇〇〇万 (kalpa) × 一〇〇〇万 (koti) × 一〇〇 (sata)。
- 66 ヨーガとサーンキヤについては『バガヴァッド・ギーター』(239)のなかで対で用いられるときは、それぞれ実践と理論である。ヨーガは行為のヨーガ (karmayoga) を意味する。上村一九九二：一五三によれば、行為のヨーガは「最高の境地(ヨーガ)に帰結する行為。執着することなく、行為のものに専心すること」。サーンキヤは知識のヨーガ (jñānyoga) を意味し、BHG 2.12-30ではアートマンに関する正しい知識のことである。上村一九九二：一四七―一四八参照。
- 67 「知識」(vidyā)。解脱を導かない知識なので、アートマンの真理知ではない世俗知。
- 68 「他の道」。VC 22註参照。
- 69 「最高の真理」。梵我一如のこと。瞑想体験によってのみ体得できる。論書によっては知られない。
- 70 「努力」(prayana)。努力して瞑想することによって、アートマンの真理である梵我一如を体得できる。
- 71 瞑想としてのヨーガの実修をせずに、という意味。
- 72 「幻」(māyā) はシャンカラにとっては術語としての重要性はない。前田一九八〇：二三八参照。
- 73 VC 72註参照。
- 74 「努力」(prayana, yāna)。VC 62註参照。
- 75 Madhavananda 1921は prasakta (固執) を聖典命令 (enjoined in the Scriptures) と解釈する。
- 76 解脱の直接原因については BĀU 4.4.6: athakāmayamāno yo 'kamo niṣkāma āptakāma ātmakāmo na tasya prāṇā ukramānti | brahmaiva san brahmāpyeti 、「それゆえ、(アートマン以外に) 欲望のない人、欲望がなく、欲望を離れ、(アートマンに対する) 欲望に満足し、アートマン(だけ)を求める人、その人の諸感官(ブラーナ)は(死ぬときに新たな身体へ入るために)上方へ出ていかない。彼はブラフマンそのものであり、ブラフマンに行へ」 BĀU 4.4.23: eṣa niyo mahimā brahmaṇasya na vardhate karmaṇā no kanyān | tasyaiva syāt padavī tam viditvā na lipyate karmaṇā pāpakeneti | tasmād evaṃ vic chānto dānta uparatas tīrīksuḥ samāhito bhūtātmany evātmanam paśyati | sarvaṃ ātmānam paśyati | nainam pāpmā tarati | sarvaṃ pāpmānam tarati | nainam pāpmā tapati | sarvaṃ pāpmānam tapati | vipāpo virājo 'vicikīso brāhmaṇo bhavati | eṣa brahmalokah samatī | enam prāpīto 'sti hovāca yājñavalkyaḥ | 「ブラフマンを知る者(ブラーフマナ)の」

の永遠の偉大さは、業によって増減しない。まさにその足跡を知る者であるべきである。それを知れば、悪業によって汚されない」と。それゆえ、このように知る者は、寂靜で、自己制御しており、平靜で、忍耐があり、心統一して、自分のなかでのみアートマンを見て、すべてをアートマンであると見る。悪が彼（ブラフマンを知る者）を超えることはなく、「彼が」すべての悪を超える。悪が彼を焼き尽くすのではなく、「彼が」すべての悪を焼き尽くす。彼は悪がなく、欲望なく、疑いのないブラフマンを知る者（ブラーフマナ）となる。これがブラフマンの世界である、大王よ。あなたはそこに到達しているとヤージュニャヴァルキヤは言った」など参照。

77 「無分別」とは分別しない、現象世界を言葉で相対的に表現しないこと。「寂滅」(santi)と同義。

78 聴聞、推理、瞑想という解脱の階梯についてはすでに古ウパニシャッド文献のなかで言われている。BAU 2.4.5 = 4.5.6: ātmā vā are draṣṭavyah śrotavyo mantavyo nididhyāsavyo matreyaḥ | 「おお、アートマンは見られるべき、聞かれるべき、考えられるべき、瞑想されるべきである。マイトレーイーよ」参照。VC 67 「ブラフマンの知識の教説、推理、瞑想」参照。